

「3.11からの出発」

News



当館では震災後、陸前高田市を中心に支援活動をしてきました。市立小友小学校を定期的に訪問し、NPO法人うれし野こども図書室分館・陸前高田こども図書館「ちいさいおうち」に人材面で協力しています。

「子どもたちからの質問」 松岡享子

2016年2月9日、小友小学校訪問。これで16回目になります。震災の2ヵ月後、初めて訪ねたとき2年生だった子どもたちが、はや卒業です。昨年は、6年生だけに、はなむけとして「中国のフェアリーテール」を聞いてもらいましたが、今回は、6年生を送るお話に「美しいワシリーサとババ・ヤガー」（おはなしのろうそく4）を選び、いつものように高学年組として4、5年生といっしょに聞いてもらいました。

お話のあと、6年生の担任の先生が、子どもたちがわたしにインタビューをしたがっているがいいでしょうか、とのこと。こんな申し出を受けるのは初めてで、「喜んで！」応じました。子どもたちは、前もって相談して質問をまとめていたらしく、ひとりの子が代表で質問。まるで新聞記者よろしくすばやくノートをとる記録係もいます。用意された質問は2つで、「なぜ小友に来たか」と、「なぜ（毎学期贈ってくれる）本にひとりひとり名まえを書いているのか」というのでした。

前者には、震災の2年前「おばあさんのいす」事業で陸前高田を訪れ、小友小学校でお話をしたことがあり、そのご縁につながっていること、後者には、ひとりひとり名まえを書くことで、みんながこの本をたのしんでくれるように、本が好きになって、よい読者、よいおとなになってくれるようにとの祈りをこめているのだと話しました。

ほかに聞きたいことは？ と、尋ねたところ、ひとりの女の子から「（活動の）お金はどうしているのですか？」という質問が出ました。これはほんとうによい質問でした。わたしたちの活動を可能にしているのは、全国からのたくさんの寄付であることを伝え、チャリティ・コンサートやお話会のこと、このためにバザーや献金をしてくれる保育園や会社があることなど、具体的な例を話すことができました。さらには、わたしたちの社会がその必要を満たすには、公的な税金と、志に基づいた自発的な寄付の両方が要ること、おとなになるということは、保護され、恩恵を受ける側から、社会に寄与する側にまわることだということなどというところまで、話が行ってしまいました。大きく目を開いて聞いてくれた子どもたちですが、果たしてどう受け止めてくれたでしょうか。

* 28～29頁のランプシェードもご覧ください

●引き続き、活動資金へのご寄付をお願いいたします。

振込先：ゆうちょ銀行／郵便局 口座記号番号：00130-9-115393 加入者名：公益財団法人 東京子ども図書館
ニュースレターのバックナンバー（2011年4月16日～）は、ホームページでご覧になれます。